第２回　お茶の京都推進会議　結果概要

日　　時　　平成２６年１２月１０日（水）１５：００～１７：００
場　　所　　宇治茶会館　大ホール

◆開会あいさつ（岡西副知事）

長い目で見て子や孫に何を残すのか、自分たちは何を大事に暮らしているのかを認識して、それを外の人に見に来てもらい、経済活動、雇用につなげればと思っている。活発な議論をお願いしたい。

１　お茶の京都構想（中間案）について説明

別添資料『「お茶の京都」構想（中間案）（たたき台）』の説明

２お茶の京都実現に向けた具体的な御提案等について

（１）　戦略的な交流拠点づくりに向けた各地域での取組み等

○宇治市

・宇治橋周辺を拠点とし、歴史・文化の香るまちづくりをコンセプトに事業推進を図ることとし、その柱として平成３１年のオープンを目指して、太閤堤跡歴史公園整備事業を実施。
・東京オリンピックにあわせて源氏物語ミュージアム等の改修を計画。

○城陽市

・「五里五里市」は、お茶の京都エリアの中間に位置し、休憩していただくことができ、おもてなしの拠点として整備したい。
・文化パルク城陽には茶室があり、ほんものの抹茶に触れていただきたい。
・１１月８日を「じょうようお茶の日」として制定しており、無料お茶席を設けて振る舞った。
・荒見神社では定期的にお茶席を開催したい。
・新設予定の道の駅では、梅、金銀糸、お茶をＰＲしたい。茶室の併設を検討している。

○八幡市

・石清水八幡宮は「献茶講」をしている。雄徳山（おとこやま）茶園を平成１６年に整備し、茶摘み、手揉み製茶をおこない、天皇陛下に献上している。
・松花堂庭園では小中高校生にお茶に親しんでもらう催しを行っていきたい。
・四季彩館では景観のすばらしさを継承していく場としたい。

○木津川市

・環の拠点創出事業を行っており茶問屋街を中心に整備中。今後、環の回廊づくり事業に取り組んでいきたい。

○京田辺市

・平成２７年度から、ＪＲ京田辺駅、近鉄新田辺前広場にて、面的にバナーフラッグを掲揚する。

・三山木駅前広場交通島にて、寒冷紗を備えた茶園風の植栽を実施。平成２７年度計画、２８年度実施。

・普賢寺と飯岡の茶園景観を拠点とし、普賢寺ふれあいの駅のリニューアル等を行っていきたい。

○久御山町

・お茶の京都の北の玄関口として、クロスピアくみやまにて、平成２７年度からの新たなにお茶の販売や観光案内などのおもてなし機能を持つことを検討。

○井手町

・まちづくりセンター「椿坂」を拠点とし、町内でのワークショップにより町内資源を活用した地域活性化策を検討する。

○宇治田原町

・湯屋谷エリアを拠点とし、宗円生家を核に観光客を呼び込み、宗円が耕作していた上大福茶園まで回遊できるよう、案内看板等の設置を行っていきたい。

○笠置町

・他地域とのつながりの中で茶の消費拡大に貢献し、観光誘客の拡大を図りたい。

・先日開催された鍋－１グランプリで、中学生がお茶の振る舞いを行うなどの取組みも進めている。

○和束町

・和束茶カフェを中心として、茶畑景観を活かした回廊システムを整備したい。

○精華町

・けいはんな記念公園は年間６０万人を集客する施設であり、年間１５０回のイベントを実施し、集客ノウハウを持つ。商工会はスイーツの街づくりに取り組んでおり、街づくりの観点からお茶の京都との連携について検討するとともに、SEIKA スイーツタウンとして発信していきたい。

○南山城村

・農産物直売所、将来的には道の駅を拠点とし、回遊システムや体験プログラムづくりを進めていきたいと考えているところ。

◆意見交換

○本田企画理事

・現時点では、民主導の取組みで「こんなことを考えている」というアイデアがあまり出てきていない。

・「こんな団体がこんなことをしたい」という具体的なプランがあれば出して欲しい。

〇出席者意見

・戦略的な交流拠点は、誰と誰が交流することが想定されているのかが不明確。地元の人と地元の人、海外からのお客様、それぞれの市町村で思いが異なるのではないか。

・構想をどう落とし込んで、どれくらいの時間をかけていつまでに、何を作り上げようとしているのかを明確にすべき。

・戦略をテーマ別に仕分けすることにより、各自治体のカラーが見えてよいのではないか。わざわざ「行きたい」と思わせるクオリティが必要で、ブランディング、マーケティングを行うためにも、テーマ別に仕分けて、テーマ毎にサポートする仕組みが必要。

→　岡西副知事

　現時点は、自分たちの街の何が大事か、何が誇りか、そのコンテンツづくりから始めているところであり、ブランディングやマーケティングよりも、まだ前の段階にいる。

・市町村によっては「既に磨いた、打って出たい」というところもあれば、もう少し時間をかけて磨いていきたいというところもあるだろう。フローとして、ステップ１、２、３と切って、どのステップにいるのかを共有しながら進めるべき。

・外に向かって発信しようとすることが中を磨くことになる。

・和束茶カフェが６年目を迎え、観光客も増えている。この施設は元々生産農家が品評会等を行っていた場であり、観光客をお迎えする場ではなかったが、販売施設としてのレベルも上がり、メンバーの考え方も少しずつ変わってきている。交流拠点としてさらに整備していくには財源的に厳しく、手助けしていただきたい部分もある。例えば、喫茶スペースが手狭になったためウッドデッキを活用しており、冬場は寒さ、風をしのぐためにウッドデッキをビニールで囲う案が出ているが、お客様を受け入れるにはもう少し良いものにしたいので、支援してほしい。

・田舎らしさを残した洗練されたものがいる。かっこいいものをつくっていきたい。

→　岡西副知事

　日本を代表するようなデザイナーにも入ってもらって、より集客力のある施設にしていくことが必要で、海の京都でもそういったやる気のあるところをどんどん打ち出していく取組みを行っており、ノウハウも持っている。

　デザインは田舎っぽい陳腐なものではいけない。集客し、キャッシュフローに変えていく必要がある。しかし、一カ所だけではだめで、カフェの次にどこを巡ってもらうかといった、広域的に回遊できるようなことを考えていく必要がある。

　口を開けて待っているだけの人は助けられないが、頑張っている人は、どんどん引っ張り上げていきたい。

・施設が十分ではないとのことであるが、和束にはすばらしい茶畑がある。京都にあるものと同じものがあっても仕方がなく、和束らしい、箱物ではない、文化を見せることが重要。和束では茶畑を夫婦で管理されているところが多く、これはすばらしいことであり、それを紹介するような取組みも面白いと思う。
・京阪バスでは来年５月の金土日に「宇治茶の香り、抹茶料理、禅定寺」として宇治のツアーを造成する。和束やその周辺をルート化した商品も作りたい。
・同じお茶でも、それぞれの地域で景観、スイーツ、体験など、様々な異なる特徴・切り口があるとおもしろいツアーになる。

・山城の各地域には、それぞれの景観、食文化、産品、行祭事などがあり、宇治という玄関口としては、連携を深め、新たな観光ルートづくりなどを進めていけたらよい。
・観光客は「緑茶をください」という。かぶせ茶、玉露、煎茶などの種類がわからないお客様に対して、お茶をわからない従業員が対応していてはいけないので、インストラクターの資格を従業員に取らせている。１年目の従業員には手摘み茶園の絵を描かせ、茶の木を知ることから勉強させている。
・茶室巡り、お茶の京都十景、写生大会、茶の和食のコンクールとか、テーマを分けてルート、イベントを設定し、これらをまとめ・連携して情報発信してはどうか。新しい宇治茶ファンの拡大にも繋がる

・スイーツについては、けいはんな記念公園と商工会との連携で 11 月 16 日に 3 万人来場のイベントで試食会を実施。行列ができて試食できないほどの賑わいであった。町内には全国で賞を取っている店舗も数店舗あり、スイーツ店同士の横のつながりもできつつある。庭園でスイーツを召し上がっていただくプランも考えられる。
・来場者 60 万人のうち、30 万人は奈良と大阪から。西の玄関口として、その方々にイベントでお茶を知っていただくことも可能だし、息の長い取組みとして「○月は○○町の月」といったサイクルで各地域のお茶を知って頂くイベントを行っていくことも考えられる。
・来場者のほとんどは 30 分圏から来られる。その方々は京都のことをあまり知らない。日常生活の中で公園に来られる方に、ほんもののお茶、京都を知っていただく場となり得る。
・お茶だけで勝負をせず、いろんな特産品と一緒に紹介する方がよいと思う。

→　岡西副知事

お茶のみにこだわっておらず、『お茶』はマーケット戦略上のものである。
けいはんな記念公園のキャッシュフローの仕組みはどうなっているか。

・６０万人のうち、50 万人は無料の芝生広場に集まっている。水景園（入場料 200 円、平均単価 70 円）入場者は 8 万人。他に自主事業をいろいろ行っており、公園としての売上げは年間 2,000 万円程度。

・各市町村の拠点はわかったが、それをつなぐ「何か」が欲しい。市町村間の回廊の中でそれぞれの特徴のあるお茶を飲むようなことはどうか。
・現代は「お茶しましょう」という言葉は、コーヒーを飲むイメージ。「お茶しましょう」という言葉が、気楽に、宇治茶を飲むということばになればよい。

・お客さんがたくさん来るようにしようということであるが、車では入れない場所もあり、歩いて来てもらわないといけない。歩くことは健康につながる。
・見つけたくなる「仕掛け」が必要であり、お茶を掘り下げられる「謎解きゲーム」のようなツアーなどができればおもしろい。
・各地域の学校教育での取組みによって、こどもたちのお茶に対する知識は異なる。それぞれの地域でお茶や地域のことをもっと知るようになればよい。
・小学校で、1 時間の授業の中で山城の誇れる宝を、5 つほど売り込むような授業に取組み始めている。それを山城全域でできれば、山城のこども達に誇りを持たせることができ、こどもを通じて家庭に広げることもできる。

○中村農林水産部技監

・教育の観点では、学校教育のどういう時間の中で取組みができるのかを考えないといけない。

○岡西副知事

・大人がお茶を知らない。大人が大事にしていないからこどもにつながらず、定着しない。
・自分の街で誇れる 5 つを話せる大人がいない。自分たちの大事なものは何なのかを問い直していく必要がある。それをみんなで伝えていくというプロセスが必要。
・こどもに教えることは手っ取り早いが、まずは大人が誇れるものをしっかりと持たないといけない。

○本田企画理事

・給食時に急須でお茶を継続的に出すような取組みについて、各市町村でも教育サイドに働きかけていただきたい。

（２）宇治茶の魅力をつなぐ回遊システムの整備

◆宇治茶かおり回廊の取組方向（山城広域振興局）

・『「お茶の京都」構想（中間案）（たたき台）』Ｐ４により説明。

○出席者意見

・奈良県と京都府がサイクリングを念頭に置いて作った地図は、京都南部から奈良北部までが一枚に入っており、このような地図がほしかった。地図に落としてイメージづくりをしていけばどうか。

◆お茶の京都と自転車についての提案（杉野氏）

・スポーツ、レクリエーションとしてサイクリングに取り組むのは、全国で約２０００万人。その方々にお茶の京都に来ていただくにはどうしたらよいかを提案したい。
・ロングライド愛好家にとっては、山城地域は大阪から１日のコース。自転車乗りにとっては坂が適度にあり、自動車が少なく、景観がよい、関西では有名なスポットで、犬打峠は自転車乗りならみんな知っている。
・楽しみとしてのサイクリングをする人（ミドルユーザー）にとっては、車でこの地域に来て､1 日で走ってもらうのにちょうどいいエリア｡輪行（自転車を電車に乗せて移動し、サイクリングを楽しむ）する人もハンパない数がいる。
・初心者（ローユーザー）には、駅やバス停からのレンタサイクルが最適
・サイクリング自体が体験であり、自転車とお茶、アウトドアとお茶の組み合わせなど、体験とお茶の組み合わせはおもしろい。
・ちゃりロゲ（千葉県で初めて行われた。奈良県でも行われた。）は１００キロ圏内でチェックポイントを通過することにより拠点を巡り、一日遊んでいただける。お茶を使ったスイーツ店をチェックポイントにし、その店舗からスポンサー料をいただくなども考えられる。完走証を発行すれば参加者は達成感を得られる。
・行政からは、休憩できる拠点にバイクラック、駐輪スペースなどの整備を呼びかけていただきたい。
・しまなみ海道は自転車乗りの聖地呼ばれており、ブルーラインを伝っていけば迷わずに走れる。奈良では、「ならクルポスト」として、自転車用の案内板が整備されている。お茶の京都のイメージでこういった案内板が整備されると広域の回遊に役立つ。
・サイクリストに優しい宿として、部屋に自転車を持ち込めるなど旅館に手を挙げていただいて、統一 web サイトに掲載している。お茶の京都でもこのような取組みをすればよい。
・サイクルトレインとして自転車をそのまま持ち込める電車もある。

◆お茶の京都観光協議会について（京都府観光課）

資料『「お茶の京都観光協議会」概要』により報告

◆意見交換

○出席者意見

・コンセプトに関して、メディアはそれぞれの地域の違いを考える。この地域にはどんな魅力があるのかを深掘りしていただくと、外から見た地域の特色になり、メディアも表現しやすくなる。お茶以外の魅力も大切にし、情報整理をしていただきたい。

・それぞれのエリアにどういう競争力があって「外貨」を稼いでいるのか、潜在的な競争力は何なのかを整理されるとよい。稼いでいる力とお茶をつなげることが大切。
・伝統芸能やお祭りなどのコンテンツを地元で整理し、それを磨き、ゾーン展開する際のストーリー立てについてＪＲとしてお手伝いできると思う。

◆閉会あいさつ　本田企画理事

・地域で一番いいものは何なのかを次世代のことも考えながら見つけないといけない。民主導でしていきたい事業のアイデアをいただきたいし、地元でしっかり議論して欲しい。その際には我々も参加させていただく。